第45回児童生徒読書感想文コンクール

児童生徒読書感想文コンクールに、多くの優秀な作品が寄せられました。
先月に引き続き、最優秀作品を紹介します。

■小学校5年生の部　最優秀賞
ありのままの自分
川湯小学校　井出　果音さん

私が読んだ本は『わたしの苦手なあの子』です。この本はこれまでくり返し読んだ本で、ぜひ感想文を書きたいと思っていました。

題名の『わたしの苦手なあの子』のあの子とは、転校生の本間リサといいます。リサはツンとすまして、だれとも仲良くならないし心臓がわるいと言って、プールはいつも見学しています。でも、主人公のミヒロはそんなリサのひみつを知ってしまいます。リサの足には、大きなやけどのあとがあったのです。リサは、それが原因でいじめられ不登校になり、ミヒロのいる学校に転校してきたのでした。リサとミヒロは、少しずつ仲良くなります。足のやけどのあとが気持ち悪いと思われるのがつらくて、プールにも入らず、足を長ズボンでかくしているリサをミヒロははげまして、いっしょに短パンをはいて、買い物に行ったりします。そして、最後にはいっしょにプールに行き、楽しく泳ぐこともできるようになります。リサが、プールに行けたことをリサのお父さんやお母さんもとても喜びます。ミヒロという友達のおかげで、リサは『ありのままの自分を好きになる』という、課題を克服したお話です。

この本で一番、心に残ったシーンはリサが短パンをはいて、やけどの足を見せてスーパーに買い物に行くところです。前の学校で、リサをいじめた子たちと会うのですが、ミヒロがリサの味方になって守ってくれた時、リサがミヒロのおじいさんに言われた、『人をきずつけるのも人だが、なおしてくれるのも人なんだよ』という言葉を思い出します。

私は、この言葉がとてもいいなぁと思いました。

私たちは、一学期道徳の学習で、電車の中で女友達に「足、太いね。」と言われた女の子のエピソードを勉強しました。自分がもし、同じことを言われたら、どう言い返すか考えました。私がその時考えたのは「太いけれど何か悪い？」と開きなおる言葉です。

他には、「そうでしょー。私足太いのー。」と全然気にしない子や、「あなたは、うでが太いね。」と言い返す子もいました。先生は、「そうなの。太くてかわいいでしょ。」とユーモアに変え笑いに変える、プラス思考を紹介しました。一番、おもしろかったのは、「すね毛もすごいよ。ホラ。」と言い返した、男の子がいてみんなで大笑いしました。

私は、この道徳のお話と『わたしの苦手なあの子』がにていると思いました。「足、太いね」と言われておこったり、悲しくなったり、傷つく子は、「ありのままの自分」を好きになっていないのです。逆に、気にせず、ユーモアに変える子は足が太い自分、ありのままの自分が好きでいられているのです。

リサが、やけどがある自分を好きになれたら、からかわれても傷つかず気にしないでいられるのだと思います。

私は、この本を読んで、ミヒロからは、友達を助ける勇気、リサからは人に自分から関わろうとする勇気を学びました。

私も、ミヒロのように、友達がなやんでいたら助けてあげて、リサのように主体的に人に接したいと思いました。

私はほかに、『クララいっしょに走ろう～しょうがいをもった白いシェルティ』を読みました。これは、クララという犬が飼い主の愛子さんに助けられるお話です。

愛子さんが人を助ける相手は犬ですが、しょうがいのあるクララと、やけどのあとがあるリサの姿、犬を助ける愛子さんと友達を助けるミヒロの姿が重なりました。

このお話にも相手を傷つける人と傷ついた人をなおす人が出てきました。

私はもちろん、友達や動物を傷つけるのではなく傷ついた人をなおせる人でありたいです。

書名
『わたしの苦手なあの子』
朝比奈　蓉子　作

（寸評）
くり返し読み、ぜひ感想文が書きたいと思えるほど、素敵な本に巡り合えたことは、果音さんにとって幸せなことでしたね。『ありのままの自分を好きになる』や『人を傷つけるのも人だが、なおしてくれるのも人』という言葉は、胸に響く良い言葉だと思いました。また、自分の学習経験や他の読書経験と比較し、考察することができており、読書感想文のお手本となるような、とても素晴らしい文章でした。今後も、素晴らしい本と出会えるといいですね。

■小学校6年生の部　最優秀賞
本当の自分との出合い
弟子屈小学校　土屋　七星さん

アンモナイト・三葉虫。他にもたくさんの種類がある化石について、知っていたり、興味を持ったりしたことはありますか。家に化石があったり、見たことがない不思議な石を持っていたりしますか。私の家には貝の化石や、黒曜石みたいな黒くてピカピカ光っている石があります。それは、見つけたものや、私が体験教室にいって、見つけて、発掘したものです。北海道でも恐竜の発見があって、その中の一人であり、「世界の何だコレミステリー」にも出演し、足寄で講演会もした小林快次さんに興味と関心を持ちました。そして、恐竜少年じゃなかったのになぜ恐竜学者になったのか、なぜ三日坊主でいいのか知りたくて「化石ハンター」を読むことにしました。

小学生の頃は仏像やお寺が好きで、中学生の頃に化石と出合います。化石はさまざまな生命が長い時間をかけて引き継がれてきてその結果、私たちがいまここにいるということを実感させてくれたそうです。でも、化石の種類などについての知識を得ることには一切興味はなく、宝探し的な感覚で楽しんでいたそうです。化石に熱中して続けられたのは、他人の物差しとは無関係に、純粋に自分自身で面白いと思ったことをしていたからです。今の私はスライムづくりを夢中でしています。洗濯のりやホウ砂の量を変えたり、色やラメを加えたりして、いろいろ作っています。自分で変えた方法でできるスライムは毎回ドキドキワクワクです。

彼は何気ない生活を送っている中で、自分には何もないことに気づき、遠い先を見るのではなく、今、目の前のこの瞬間を大事にして、自分が本当に好きなものはなんだろうと、問い続けることになります。恐竜図鑑を開いて「一歩」を踏み出してから、一歩一歩確実に歩いている、そのことに自信をもって、その結果どこにたどりつこうと、それは誇るに値すると思って一歩踏み出しています。

「あ、面白そう。」という軽い気持ちで一歩踏み出してから、飽きたらいつでもやめればいいを、今日まで続いているのにびっくりしました。そのうえ、三日坊主はすごくいいことだと言っています。三日でもやってみたという、その事実に価値があって、いやになってやめたのは、それが自分に向いていないと確認できたというのです。私はお母さんに「すぐ飽きてだめでしょ」と言われたことを思い出しました。しかし、今度は「飽きっぽいのではなく、ただ私に合うものに出合っていないだけ」と思うことにしました。何でもいいからたくさん試してみる。たくさん試してみて、私に合う物、やっていて楽しいと思えるものを見つけることができればと思います。私は小林さんのように一歩踏み出して、たくさんのことに出合って、面白そうという気持ちを忘れずにチャレンジしたいと思いました。

書名
『化石ハンター』
小林　快次　著

（寸評）
この感想文の題や本文で繰り返し使われる「出合い」という言葉は、七星さんが読んだ本「化石ハンター」の著者が文中で使う言葉の一つです。著者の思いや生き方への共感だけではなく、著者が書き表した「言葉」や「叙述」にもしっかり目を向けたことで、七星さんの視点や考え方が更に拡がったことが伝わります。高学年らしい読書感想文です。

そのほかの最優秀作品についても、来月以降順次紹介していきます。
※児童の学年は、コンクールが行われた令和二年度当時のものです。